

漢法苞徳塾資料	No. 299
区分	巻頭言
タイトル	<b>歴史的蓄積の重み</b>
著者	八木素萌
作成日	

漢法医学は湯液・鍼灸ともにブームと言う。喜ぶべきことであるが、また憂うべき問題も生じている。

「方」はあるが「法」と「理」が軽んじられて、プラクティカルにだけ横行する。実用面ばかり喧伝される。然し、若し「法」と「理」が忘れられれば「一時的の流行現象」に陥って、流行が廃れれば、世間から忘れられることになる。「鍼灸の適応範囲の確定が必要である」という論も聞く、誰がどういう状況のもとで、これを主張しているかが問題である。

「科学化」の必要が叫ばれる、それを主張する人達の「科学とはどういうものであるか」についての定義は、いまだ聞いたことが無い。漢法医学は、成書が成立してからでも、既に2000年を越えた。その歴史が蓄積してきた「理」と「法」とを、真剣に研究しないで、「科学化」や「適応範囲」というのは、不遜なことではないか？

2000年も蓄積され守護されてきた歴史＝人智の営為を如何に学ぶかこそが問題であり、それを如何に現代に生かすかが問題であろう。

何ごとによらず、基礎・基本ほど大切なものはない。原典を忘れ基本を忘れることほど恐ろしい事はない。重大な局面ほど、原典・基本がしっかりした者は強い。「ブーム」に浮かれている者は、「流行」が廃れれば新しい現象に漂流して行けば良からうが、それは決して本流を行くことにはなるまい。世間に漂よい流される者と歴史を形成して行く者との相異である。

今、ブームだからこそ、心ある者は「法」と「理」とを確固としたものにしなければならない。インチキの横行を許さない為にも！